慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評: 干川剛史「自律的公共性への構造転換に向けて：市民社会の基盤としてのメディア・ネットワーキングの可能性」『社会学評論』45-3, No.179, 1994
Sub Title	
Author	鈴木, 智之(Suzuki, Tomoyuki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	1996
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.1 (1996.) ,p.87- 88
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評リプライ
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19960000-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：干川剛史「自律的公共性への構造転換に向けて－市民社会の基盤としてのメディア・ネットワーキングの可能性－」『社会学評論』45-3,No.179,1994

鈴木 智之

コンピューターを核とした通信技術の普及によって、「一般の市民」にも大量の情報を広範囲の人々と自由に交換することが可能になる。そのコミュニケーション・ネットワークの上で、「市民たち」はマス・メディアから与えられた情報を批判的に吟味しつつ、政治的・社会的問題に対して自分たちの意見を練り上げ、意思表示を行うような場を獲得することになるだろう。これが、この論文の提示するとても前向きなヴィジョンである。・・・なるほど、それはひとつの可能性なのだろうし、すでに具体性を持ち始めたシナリオでもあるのだろう、と思う。しかし、どこか話がうますぎる、という感じがする。思いつくままに、そのシナリオへの違和感を言葉にしてみよう。

(1)コンピューターという通信の道具は、本当に「市民的公共性」のメディアとして使われていくのだろうか。コンピューター通信が大きな潜在能力を持つ伝達の道具であることは疑いえないが、道具はその使用法を決定しない。どれだけネットワークが発達しても、それを利用する側が合理的な判断能力と政治的な文化を備えていなければ公共性のメディアとはなりえない。はじめから政治的な言語を持たない人間に道具だけ提供しても「市民的」な関係など生まれようがないのではないか。(2)思考の道具としてのコンピューターは、政治的で批判的な理性を培養するようなメディアとなっていくだろうか。メディアは、それぞれの形態と速度と関係に応じて、異なった思考のスタイルを要求する。コンピューター通信が可能にする「オンライン上の思考」はどういう形を取ろうとするのだろうか。それは、「公共の問題を批判的に吟味する合理的な理性の働き」と相性のいいメディアなのだろうか。例えば、そこに流通する情報の量と速度だけを考えても、ひとつの問題をじっくり考えるにはちょっとつらいような気がするのだけれど。(3)メディアは、人をつなぐと同時に分断もする。コンピューターは今のところあまり使い勝手のいい道具ではないし、その問題が解消されたとしても、あまり使いたくない人は残るはずだ。このメディアへのアクセシビリティはかなり不均等な形で配分されるだろう。この時、コンピューターを核とした通信網は、その外にたくさんの人を取り残す。参加のための道具が排除の道具になってしまう可能性はないのだろうか。

こうしたいくつかの疑問は、つきつめてみれば、「コンピューターを道具として操る合理的な人間（関係）」を前提として議論を進めていく事への疑問につながっていく。そうした「市民」像がどこまでリアリティを持ちうるのか、言い換えれば、新しい通信技術を「市民的公共性」の道具として機能させうるような「文化」がいかにして用意されうるの

か、という問題に議論は立ち返っていくと思う。そうすると例えば、コンピューター・リテラシーの問題も含めた形で「言語的社会化」と「政治的社会化」のあり方を検討し直すことも必要になる。そして、そういうところに視点を移してみると、そうそう明るい展望ばかりも描けないように僕には思えるのだがどうだろうか。

(すずき　ともゆき　法政大学社会学部)

リプライ

干川 剛史

鈴木智之氏の書評における私の論文への３つの「違和感」についてお答えしようと思う。

まず、(1)「どれだけネットワークが発達しても、それを利用する側が合理的な判断能力と政治的な文化を備えていなければ公共性のメディアとはなりえない」という指摘は、その通りである。

例えば、ＮＧＯ／ＮＰＯ独自の地球規模のコンピューター・ネットワークであるＡＰＣ（Association for Progressive Communication：進歩的コミュニケーション協会）ネットワークは、環境・人権・平和といった問題に対して「地球規模で考え、地域に根づいた行動をする」という政治的な文化と、それを達成するための合理的な判断力を備えたＮＧＯ／ＮＰＯのメンバーが利用することで、地球規模の一種の「市民的公共性」を作り上げていると言えるであろう。

次に、(2)の「思考の道具としてのコンピューターは、政治的で批判的な理性を培養するようなメディアとなっていくだろうか」という疑問は、コンピューターをコミュニケーションの道具でなく、「思考の道具」として位置づけている点でいささか的外れな指摘である。

そこで、この指摘をコンピューター・ネットワークによるコミュニケーション様式の変化に関するものとしてとらえるならば、コンピューター・ネットワークの利用によって「いつでも、どこでも、誰とでも」コミュニケーションを行うことが可能となるが、他方で、こうした形のコミュニケーションは、その流れが分散したり、途切れたりする傾向があり、鈴木氏が指摘しているように「ひとつの問題をじっくり考え」議論するのには、不向きな性質がある。

そこで、議論が円滑に進み収斂していくような工夫が必要となるが、そのやり方は、現在、試行錯誤しながら考え出されている段階である。

(3)の「この（コンピューター・ネットワークという）メディアへのアクセシビリティーはかなり不均等な形で配分されるだろう」という「情報格差」に関する指摘について。この問題を解決するには、コンピューターがもっと使い勝手の良いものとなり、また、コン